

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

令和2年5月

長岡造形大学

はしがき

本書は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、令和2年3月16日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目次

掲載順	学位の種類	学位記番号	氏名	論文題目	頁
1	博士（造形）	甲第2号	長谷部 原	新潟県における現代美術家集団GUNの長期的ネットワークと同時代的共振	1

氏名	長谷部 原
学位の種類	博士（造形）
学位記番号	甲第2号
学位授与年月日	令和2年3月16日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	新潟県における現代美術家集団GUNの長期的ネットワークと同時代的共振
論文審査委員	主査 渡邊 誠介 長岡造形大学教授 副査 上野 裕治 Landscape Design HIGHLAND PARK 代表 副査 遠藤 良太郎 長岡造形大学教授 副査 小松 佳代子 長岡造形大学准教授

論文内容の要旨

本研究では、新潟県内で1967年に設立し1975年に活動を休止した「新潟現代美術家集団 GUN (ガン)」が、そのグループとしての活動を休止した後も、形を変え様々な作家と関わりながら、約半世紀に渡り継続しているという、現代美術家集団の中では類例が見つけ難い存在であることに着目した。本研究は、このGUNが、同時代性に共振し、活動やグループ形態を変化させていく中で形成した、長期的なネットワークから、中央とは異なる地方における、現代の美術の制度展開を捉えていくものである。

本研究ではまず、GUN 前史として、新潟大学芸術科においてGUNの主要メンバーらを指導した洋画家・鳥取敏(とっとり・とし)に着目した。鳥取が関与した戦後の長野県・旧信州新町における農村芸術の運動においては、鳥取が住民に絵画を指導し、元信州新町町長の関崎房太郎(せきざき・ふさたろう)が運動のプロデューサーを務めた。鳥取が所属した二紀会は「地方重視」の方針を掲げており、鳥取は旧信州新町での運動から後の新潟大学教官としての学生指導まで、地方重視の観点を有していたと考えられる。

鳥取は、新潟大学でGUNメンバーを指導した時にも、学生に新しい美術活動を研究するグループを結集するよう指示したという。また鳥取は、後のGUNメンバーが校外(東京)で作家や評論家等に会っていることを黙認していた。これは鳥取が指導した旧信州新町の自主絵画グループが全国的に知られた存在となったことの影響があると考えられ、またGUN結成を後押しするものとなった。

このようにGUNは戦後の農村芸術の運動と地方重視の潮流の延長線上にある。またGUNは1960年代の日本で多くの前衛グループが、地方に展開していった潮流の最後発組でもある。この二つの潮流が交差するところからGUNは始まっている。そのため、地方色が強いグループとなっている。

次に、GUNの活動期から現代2010年頃にかけての長期的なネットワークを可視化し、これをもとに、ネットワークの時期ごとに分類を行った。これにより全体が高度経済成長期周辺、活動休止後のバブル時代周辺、そして大地の芸術祭が絡むバブル崩壊後の3つの時期に分類された。

GUNにおいて、3つの時期それぞれの同時代性により変化する作家らの結集のありかたは、「母集団」となる存在があり、「きっかけ」となる要素があり、背景となる「時代の空気」があって「共感の発生」があり、「集団化」が発生し、そして集団化がさらなる「きっかけ」を生み、「集団化」に変化が生まれるという流れで、共通性をもって変化していくものと捉えられた。

なおこの過程の中で、「大地の芸術祭」の総合ディレクター・北川フラムとGUNメンバーとは12年をかけやり取りを継続し、地元作家が関わるプラットフォームを形成している。

次に、このような同時代性により変化する組織がいかに継続性を有したのか、という

ことに注目し GUN の代表作品である《雪のイメージを変えるイベント》を中心に展開を捉えた。

GUN が継続性を有した要因として、このイベントの象徴的なイメージが、時代の変化の中で社会に拡がり消えずに継続したということがある。この拡がりには 1960 年代末のアースワークの限定的な情報に、1950～60 年代のハプニングの手法を組み込んだことによって、刺激的でありかつ、広い世代に受け入れられる象徴イメージとなったものと考えられた。またこの作品の象徴イメージが GUN の作家活動の中に内包されたことも、長期継続性につながった要因と考えられる。

なお、このイベント前後の同時代的共振の関係を捉えるとイベント前は、様々な関係の中で雪イベントを創出していこうとするアート表現中心の過程として捉えられ、一方で、雪イベントの後は、政治的要素を伴った社会との関係性の表現が中心と捉えられ、転換が見られた。しかし雪イベント後に GUN が政治団体化したということではなく、美術の一環として行動・実践に取り組むという同時代的な表現スタイルへ移行したものと考えられた。

これは GUN メンバーの強い「表現」への意欲の反映とも捉えられる。

GUN は、「母集団」「きっかけ」「時代の空気」「共感の発生」「集団化」という関係の中で同時代性に合わせて柔軟に変化しながら、象徴的な作品によって社会に浸透することで継続性を保ってきた。

日本の美術制度は、近年、「大地の芸術祭」のような大型美術展の展開が顕著であり、住民等が参加するためのプラットフォームが形成されている。今後は、時代に合わせて柔軟に変化する GUN のような美術家集団が中心になって、地域の様々な企業・自治体・各種団体等が参加する、長期的ネットワークとしての地域プラットフォームを構築して、表現活動を支援して若い作家が育っていくことが有効と考えられた。

審査結果の要旨

論文提出者は、学位申請論文の内容および関連事項について十分な学識を有しており、本論文は地方における現代美術の展開に示唆を大いに与える内容になっていることから、博士（造形）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。

審査委員の審査評を以下のとおり示す。

（主査 渡邊誠介）

本論文は、新潟県における現代美術家集団 GUN について、その設立から「大地の芸術祭」に至る過程と関連性を体系的にまとめ、その存在意義を検証したものである。

特に、当事者に直接あるいはメールなどでインタビューをして、生の証言を得ている点、巻末に付された 37 頁に及ぶ資料によって、当時の状況が鮮やかに示されている。これらの資料は、申請者の社会的立ち位置があつてこそ収集可能であり、このオリジナリティは、出版物とは異なるオーラルインタビューの成果として貴重である。

今後の、地方における現代美術の展開に示唆を大いに与える内容になっており、本論文は本学大学院造形研究科造形専攻博士（後期）課程 造形理論領域の博士論文として十分に評価に値すると考える。

（副査 上野裕治）

本論文は、新潟という数少ない地方都市における現代美術家集団 GUN について、その設立から「大地の芸術祭」に至る過程と関連性を体系的にまとめ、その存在意義を検証し、今後の地方都市における美術活動を支える地域プラットフォームのありかたについて考察したものである。

このような歴史的な研究は、過去をふり返るばかりではなく、その過程から見出される様々な時代的、地方的葛藤をふり返り検証することにより、「大地の芸術祭」のようなアートイベントの今後の展開について選択肢を大きく広げることになる。

以上のような論文の内容から、本論文は本学大学院造形研究科造形専攻博士（後期）課程 造形理論領域の博士論文として十分に評価に値すると考える。

（副査 遠藤良太郎）

アートを研究の主題とすること（一作品から、作家の活動等）は自ずと特殊性の沼地に踏み込むことにならざるを得ない。まさに、どの事象も唯一無二に特殊な解として成立している。そこから一般的または汎用性のある法則を見出すのは多少なりとも飛躍が必要であろう。

その中で芸術家集団 GUN の活動について、旧信州新町の「絵を描く村」にまで遡り、そこから新潟大学芸術科を揺籃とするその結成と、それ以降の活動が大地の芸術祭まで連なることを関連付けて記述するには、様々な状況を結びつけるレトリックに難しさがあった。これは本研究が史的、美術的、社会学的な多様な側面を持ち、その要素の絡み合いや分析において軸足を絞りきれない、または絞らない、断定的な帰結（特殊な解としての制度を見出すこと）を避けるべきであるが故の帰結には、当初ある種の弱さがあ

るように感じた。

しかしながら、段階を経て、それらの諸事項がパラレルにある状況を照射すること自体にこそ意義があり、さらに加えて発展的な研究の道筋も見えていることに著者自身もよく自覚していると確認できた。

これらを勘案し、博士論文として十分な内容であると考ええる。

(副査 小松佳代子)

本論文は、新潟で1967年に設立された現代美術家集団 GUN について、その設立前史から、活動の展開、ネットワーク形成のモデルとしての意義について詳細に考察したものである。本論文は以下の点で評価できる。

1) GUN をめぐる縦系(歴史的コンテキスト)と横系(同時代的共振)を追っている点。

歴史的コンテキストとしては、戦後直後の信州新町での農村芸術の展開にまで遡り、戦後さまざまな地域に展開した前衛芸術の潮流のなかに GUN を位置付けていること、同時代的共振としては、GUN の活動時期における内外の美術状況を新潟の地に即した形で理解しながら活動していた様相を浮かび上がらせていることなどに独自性が見られる。

2) 文献の渉猟はもとより、当事者に直接あるいはメールなどでインタビューをして、生の証言を得ている点。

巻末に付された37頁に及ぶ資料によって、当時の状況が鮮やかに示されている。こうした生きた資料は、その性格上、その都度の状況や聞き手との関係などによって内容が変動することがある。申請者は、人間関係を構築しつつ何度もやりとりを重ねることで、言外にこめられた意味や細かなニュアンスを読み取り、時に矛盾するさまざまな言説から何とか一つの像をつかみ取ろうという繊細な作業を行いつつ本論文を執筆している。

3) 上記2)でも見たように、当時の状況や人的なつながりなどの細かな事実を積み上げることで、大きな物語を描き出している点。

信州新町の農民芸術運動にしても、GUN の代表作《雪のイメージを変えるイベント》にしても、その経緯に関わった人物の覚え書きや証言を積み上げることで、一つの像が立体的に構築されていく。農民美術や地方の芸術活動に関しては、先行研究や資料が豊富にあるわけではない。その中で、細かな事実に着目することで、当時のリアルな状況をつかみ取ろうとしている。

4) GUN という事例を通して、美術文化が継承されていくためにはどのような形で地域プラットフォームが形成されなければならないかということを見いだしている点。

本研究が GUN の過去の活動を追うだけでなく、今後の新潟において文化や表現活動が継承していくような制度設計の基礎となる知見を得ている。これが実効性のある提言であるかどうかについては、まだ検証されておらず今後の課題と言えよう。